

河崎氏館跡(川崎市)

(かわさきしやかたあと)

ここ稲毛神社周辺が河崎氏館跡という/右手は国道一号線



正面が稲毛神社拝殿/手前は大鳥居



拝殿/大岡實建築研究所の設計で鉄筋コンクリート造の社殿である



拡大写真

御由緒・御沿革

当社社のご創建の年代は詳らかではありませんが、御神木大銀杏の樹齢が一千年と推定されるところから、当地の古社であることがわかります。

社伝によれば、第十二代景行天皇が東国御巡遊のおり当社に賊難を避けられたといい、第二十九代欽明天皇の御代、この地方に動乱が絶えなかつたため、天皇は当社社に幣帛七串を奉り、新たに経津主神、菊理媛神、伊弉諾神、伊弉冉神を配祀せしめられ、戦勝とその後の親和協力を祈られ、以後長く勧願所であつたと伝えられます。

鎌倉時代には將軍家より社領七百石を賜わり、佐々木四郎高綱公が源頼朝公の命を受けてご社殿の造営に当たりました。

足利時代には、当時の神主が新田家と関係が深かつたため社領を二十石に削られてしまいました。しかしこの時代の信仰の深さを物語る史料として、応永十一年（一四〇四）の大般若経六百巻施入の記録があります。また新潟県の国上寺に現存する長禄二年（一四五八）銘の鐫口は河崎山王社すなわち当社に奉懸されたものです。

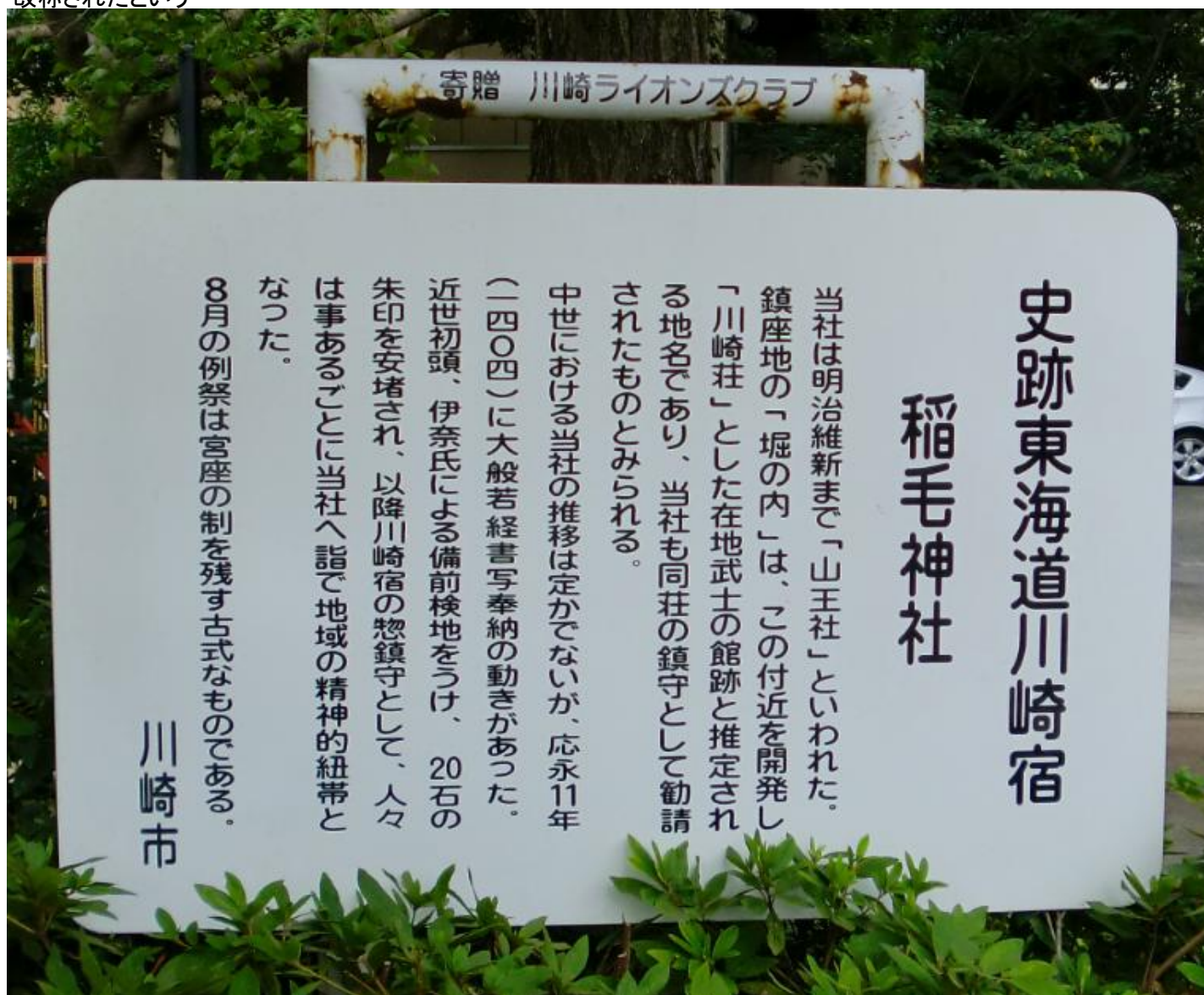
秀吉公および江戸幕府からは二十石を賜わり、江戸時代中期以降は平和な時代風潮の中で殷賑を極め、社家九家社人十三人を擁し、川崎宿および河崎七ヶ村の鎮守として広く近隣一円の崇敬を集めていました。例大祭「河崎山王まつり」は六月十五日に行われ、その盛況なさまから「東の祇園」と称されて海道名物の一つとなっていました。

当社社は初め御祭神の御名をそのままとって「武甕槌宮」と称していましたが、平安時代末期にこの地を領有した河崎冠者基家（秩父平氏）が山王権現を勧請して以後「河崎山王社」「堀之内山王権現」「五社山王」「三社宮」などと呼ばれていました。

山王権現の称号は、天台宗系の神仏習合思想「山王一実神道」によりですが、慶応四年、御征討のため下向された有栖川宮熾仁親王殿下が当社社にご休憩され、その折りの殿下のお言葉「御社名、新政府の神仏分離の方針に相応しからず」により、鎮座地武蔵国稲毛庄の名をとって「川崎大神稲毛神社」と改称しました。その後、一時「川崎大神宮」と呼ばれた時期もありましたが、明治時代中期には「稲毛神社」が固定しました。

旧神社殿は江戸時代中期の宝永年間に田中丘陵の世話によって造営された荘厳優雅な建物でしたが、昭和二十年の空襲により惜しくも灰塵に帰してしまいました。しかしその後、氏子崇敬者の赤誠によって、昭和三十八年、鉄筋コンクリート神明造り、延べ坪数百一坪の華麗なる現社殿の新築を見ました。なお当神社は、昭和四十一年、神社本庁より「別表に掲げる神社」に指定されました。

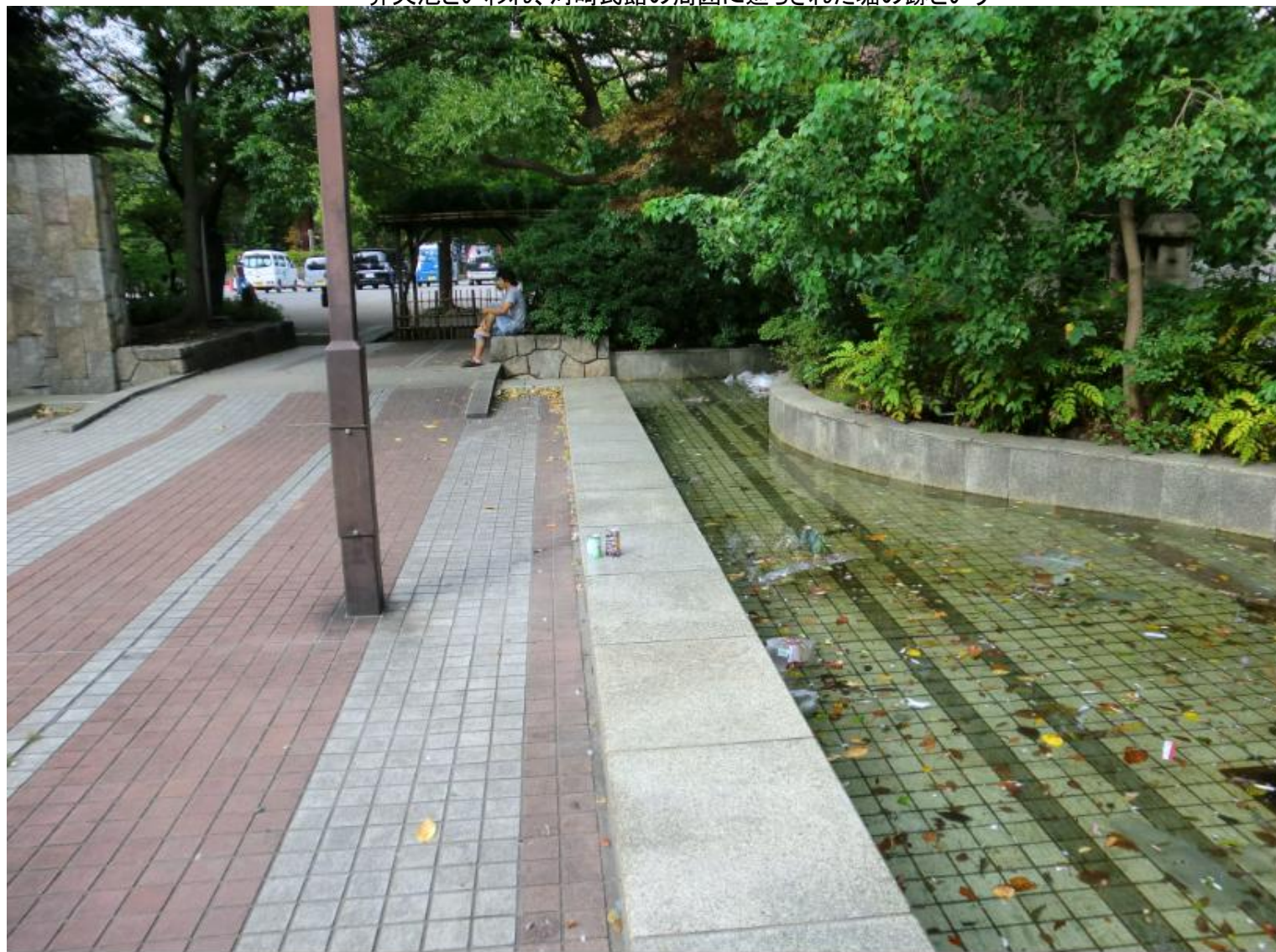
平安時代末期に当地を領した河崎冠者基家（秩父平氏）が山王権現を勧請して以後、「河崎山王社」「堀之内山王権現」「五社山王」「三社宮」と改称したと伝えられ、明治維新の神仏分離令により「川崎大神稲毛神社」へ、さらに「稲毛神社」と改称されたという



さて、境内の中に池がある



弁天池といわれ、河崎氏館の周囲に巡らされた堀の跡という



弁天池 (河崎冠者基家居館堀跡)

河崎冠者基家かわさきかむらじもとは板東平氏の雄、秩父十郎武綱の子で、平安時代せいにこの地に移り住み荘園を開いて、その子重家との二代にわたってこの地を領したと言われています。

その居館の跡とも推定されるのがこのあたりです。かつて、当時の荘園領主は、その居館の周囲に堀をめぐらせました。かつて、ここから第一国道に沿って小堤をともなった小川が流れていましたが、このあたりの地名を「堀之内」と言うことから、それは堀の遺構ではなかったのかと言われています。

また、平氏はその氏神、山王権現さんのおうじんげんをまつるのが常でした。稲毛神社は古名を武甕槌宮たけみかづちのみやと言い、景行天皇とのゆかりを伝える川崎市屈指の古社ですが、慶応四年までは「河崎山王社」と呼ばれていました。

かつては、その小川に接して大きな神池(弁天池)があり、その中の島に和嶋弁財天がまつられており、四季折々に参詣来遊するものが多かったと言います。また、江戸時代にはこの池と小川を利用して「曲水の宴まがみづのえん」が開かれておりました。その弁財天と曲水宴の歌碑二基は今も稲毛神社の境内にあって、当時の川崎の文化水準の高さを伝えています。

残念ながら、この池と小川は昭和二十年代に第一国道拡張の際に埋め立てられ、その後は、小川をせきとめて造った小さな弁天池だけが残されていました。

今回、稲毛公園改修にあたり近代的な公園にふさわしい姿に造りかえられましたが、この池は、川崎の発祥とも言うべき河崎氏居館の堀跡と、宿場時代の町民の優雅な暮らしぶりを今に伝えるものです。

また、境内にはさまざまな文化財があった/これは江戸時代中期の手洗石(ちょうずいし)



手洗石

本手洗石は、田中休愚が勘定支配格に就任した享保十四年（一七二九）に、彼の一族と手代衆らによつて、川崎宿の鎮守であつた山王社（現在の稲毛神社）へ奉納されたものです。

田中休愚（一六六一～一七二九）は、江戸時代中頃の人で、大著『民間省要』を著し、民政に大きな業績をあげたことで知られています。また、彼は川崎宿の本陣職を務め、衰退していた川崎宿の立て直しや二ヶ領用水の改修などの大事業を成し遂げたことでも有名です。本手洗石は、田中休愚と彼の活躍の舞台であつた川崎宿との係わりを物語る資料であり川崎宿に残された数少ない資料として貴重な価値をもっています。

なお、本手洗石の正面には、これを奉納した五人の名前が、力強い文字で刻み込まれています。田中仙五郎は休愚の次男で、田中団助も休愚の縁者であつたと思われます。森田重郎衛門・富永軍治・門田半四郎の三人は、休愚の土木治水事業を補佐した技術者で、現場をまわつて土木工事を指導した監督者として、当時の文献にもしばしば登場しています。

川崎市教育委員会は、昭和六十二年十二月二十九日、本手洗石を川崎市重要歴史記念物に指定しました。

平成六年三月

川崎市教育委員会



これは江戸時代中期の小土呂橋(こどろばし)の遺構



こどろばしいこう 小土呂橋遺構

小土呂は今の小川町で、この橋は東海道が新川堀(今の新川通)を横切るところにかけられていました。

新川堀は慶安三年(一六五〇)に幕府関東郡代伊奈半十郎忠治が普請奉行となって開削されましたが、そこに架かる小土呂橋の最も古い記録は、正徳元年(一七一二)に代官伊奈半左衛門によって板橋として造られたというものです。その後、享保十一年(一七二六)に田中丘隅が石橋に改橋し、それが寛保二年の洪水で大破し、翌寛保三年(一七四三)に幕府御普請役水谷郷右衛門によって再興されたのがこの橋です。

以来、この橋は昭和七年に新川とともに埋められるまでおよそ二百年間多くの人々に利用されてきました。橋脚には左のような銘文があります。

銘文中の石や左兵衛は、当時の

名工・六郷八幡塚村の永井佐兵衛、

仕手吉六は、鶴見橋そばの飯島吉六と思われる。何代かあとの吉六の名は鳥居の台石にも見られます。元請けが左兵衛、実際の仕事を吉六が行ったものようです。

この遺構は、昭和六十一年、旧川崎宿鎮守稲毛神社の境内整備事業にともない、川崎市より譲り受け、ここに設置したものです。

小土呂橋は市内の数少ない近世石造橋のなかでその年代が最も古く、規模も大きく(三間×三間)、幹線街道に幕府御普請所が架橋したものであるため、諸種の資料によって架橋の事情や構造が判明することなどから、高い資料性をもっています。

また、かつてこの橋の上を歴代の將軍や大名が通り、オランダ・朝鮮・琉球の使節が渡り、ハリスも勝海舟も、象や虎さえも通ったかと思ふと感興はつきまません。

文

御普請役
水谷郷右衛門

寛保三癸亥十二月吉日

卒取

石や 左兵衛
仕手 吉六
水沢勤蔵
富岡惣衛門
二葉久二

銘



これは江戸時代中期に建てられた大鳥居の台座といわれる



前述の大鳥居は1849年に建立されている

大鳥居

江戸時代末期の森家文書「当宿山王宮由来之事」によれば

(1)享保三年(一七一八)石

之大鳥居建立右兵庫

(田中)其筋え御願奉申

上候 処格別之御勘弁

を以かふき芝居興行舞

台等殊之外大造り二い

たし棧敷ナド二重二掛

ケ(略)其賑敷事人々目

を驚かし(略)存之外寄

金宜敷 諸入用存分二

相拂残金を以石之鳥居

相建凡金六十余兩相掛

り其外余金有之候間

金百兩余末々修理之た

めかし金二いたし置候

処惜哉 元文二至り故

障あつて失之(略)

右大鳥居之儀者 安

政二卯年(一八五五)十

月二日之夜四ツ半時

古今稀成大地震二而倒

れ大損し今者無之候

(2)嘉永二年(一八四九)宿

役人並下役一同打ち揃

い石之大鳥居を建立

諸雜用共凡百兩余相掛

り候 尤も外二者一錢

も勸化いたさず頼母子

講立候

(2)の鳥居がこの鳥居です。

倒壊してしまつた(1)の鳥

居の台座と思われるものが

足下にあります。田中兵庫

の名が読み取れます。

なお、「川崎宿問屋日記」

の弘化三年(一八四七)五月

十五日に

当宿六郷川御普請所足

金無尽取立二会目連中

ヨリ賞請候高金百八拾

兩也 此金二而山王鳥

居建立

とあります。この鳥居のこ
とと思われれます。



これは数ある境内社の中の一つ「子神社(ねのじんじゃ)」、覆屋の中に置かれている



川崎宿時代の唯一の現存建物という



子神社

御祭神 大黒主命（大黒き）
御祭神 商売繁昌、子孫繁栄
例祭日 九月十九日

当子神社は、江戸時代には須ヶ原にまつられていて里人から篤く信仰されてきました。明治三年、須ヶ原、久根崎（今の港町、旭町、本町二丁目）の人々によつて建て替えられました。社殿は総檜造りで、彫師小川清蔵による見事な彫刻がほどこされておられ、台石には当時の有力者の名が多数刻されています。

明治四十五年、合祀令により勧進主のひとり森五郎作家に移し邸内社となっていました。昭和三十二年、森家の転宅の際、当所に遷座されました。

なお、明治三年にはまだ川崎宿が存続していましたので、この社殿は、現存する宿場時代の唯一の建物です。







本殿裏手の様子



また、境内内の公園には旧六郷橋の親柱も当地に移転されていた





参考ホームページ

<http://iyokakuzukan.la.coocan.jp/003kanagawa/069kawasaki/kawasaki.html>

<http://mononohucastle.web.fc2.com/kawasakisiyakata.htm>

<http://maro32.com/%E6%B2%B3%E5%B4%8E%E6%B0%8F%E9%A4%A8/>

<http://atenzasports23z.blog.so-net.ne.jp/2012-01-23>

<http://siromegu.com/castle/kanagawa/kawasakiyakata/kawasakiyakata.htm>

http://www.d3.dion.ne.jp/~nagai_m/waki/003/setukawa3.html

<http://ww36.tiki.ne.jp/~taketyan-512/siro3/kanagawa.html>

http://www.tesshow.jp/kanagawa/kawasaki/shrine_kawasaki_inage.html

<http://utsu02.fc2web.com/shiro303.html>

<http://t-ranta.mo-blog.jp/tnikki/cat10191887/>

http://s-ohtsuki.sakura.ne.jp/sansakutenbyou/beautifulspot/Aki_no_Kawasaki_Daishi_kara_Kawasaki_EkiH231021/Sub2_Fujimi_Douri-La_Cittadella-Kawasaki_Eki/newpage02-S.html

<http://takemikatsuchi.net/kdai/index.html>

<http://www.city.kawasaki.jp/88/88bunka/home/top/stop/dokuhon/t0106.htm>

http://goshuin.ko-kon.net/shokoku_iinia/14_inage_kawasaki.html

<http://5.pro.tok2.com/~tetsuyosie/kanagawa/kawasakisi/kawasakiku/inage/inage.html>



インターネットより